河北潟湖沼研究所通信　1995年8月15日　第1巻第2号

河北潟浄化へむけて

－河北潟共和国建国（7／28）－

「共和国」議会風景

河北潟の浄化と地球環境保全をを目指して、石川県在住の中高校生と外国人留学生が運営組織（内閣）をつくり、7月28日に「河北潟共和国」を建国しました。これは、国作りを通じて世界の留学生との交流を深め、それぞれの国の文化や環境の現状を学び合い、地球環境の保護と身近の環境が悪化した例である河北潟の環境浄化について考えることを目指して企画されたものです。

河北潟周辺に住む高校生と金沢大学などに留学している各国の大学生など20数名が、実行委員会を作り、1ヶ月ほど前からほぼ連日準備に取り組んできました。晴天に恵まれた開催当日も早朝から会場の準備を始め、11時に開国しました。待ちかまえていた入場者は最初に税関でパスポートの配布を受け、通貨を購入して入場しました。会場内では留学生による各国の料理コーナー、焼鳥や焼きそばが出店され、多彩な料理が振る舞われました。また、河北潟の魚すくいコーナーはこども達に好評で、タナゴやザリガニなど河北潟に生息する動物を間近にして遊ぶ姿が見られました。また、シルクプリントコーナーでは湖沼研究所のトレードマークであるチュウヒのデザインをTシャツに印刷することに多くの人が挑戦しました。午後からは「共和国議会」が開会され、国家の合唱の後、河北潟と地球をきれいにしようという主旨の「河北潟共和国宣言」が採択されました。また、クイズ王であり、湖沼研究所の歴史委員会委員長の宮本眞晴さんの出題による「河北潟ウルトラクイズ」が行われ、会場が盛り上がりました。

29日には河北潟に手作りのいかだを浮かべ、水質の調査などを行いました。

河北潟地方の歴史Ⅰ

宮本眞晴

はじめに

当歴史委員会は河北潟地方の歴史、文化、伝承を調査し、次代に伝えたいと設立したのですが、賛同して下さる方も増え、現在の構成員は次の各氏です。

奥村　哲（国立石川高専教授　中世史）
鯉野洋子（主婦）
清水武彦（内灘町勤労者協議会会長）
杉本晴介（郷土史家）
宮本眞晴（宮本建設）

今回は本年度の当委員会の研究テーマである湖岸地方の神社について解説しますが、今年の４月から始めましたので資料はある程度揃いましたが、現地調査はまだ10数社しか行っておりませんのでご了承下さい。

我々が神社に着目したのは、海流によって移動してきた人たちがどこから来たのか、どのように当地方の人々に影響を与えたかが、祭神を調べると見えてくるのではないかと考えたからです。次年度からは中世、当地方が一向一揆でどんな位置を占めたか、近世、河北潟が舟運でどんな役割を果たしたか、近世、干拓が近隣住民にどんな影響を与えたか順次研究していく予定です。

古代

石川県の地勢は南北に約200Kmあり、大聖寺から京都の距離よりはるかに長く、隣県とは山地でさえぎられており、つながりが少なく孤立的です。

加賀の海岸は砂浜が連続しており港は河口を利用していました。能登は外浦（西岸）は断崖が海に迫り、内浦（東岸）はリアス式海岸で入り江が多くどちらも良港が多く、海上交通において加賀より有利でした。奈良期より官道が禄剛岬まで貫通しており、国営の見張所があり、急時には狼煙（のろし）(註)を上げました。海流の関係で６世紀頃まで、大和と並んで文化先進地帯であった出雲地方との交流が盛んで、加賀よりはるかに先進地帯でした。

●加賀、能登の地名について

古来当地方は越（高志・古志）の国と呼ばれた地域で大和に近い方から越前、越中、越後に分かれていました。石川県全域は越前の国に属し、能登は奈良時代のはじめ養老２年（718年）に正式に国となり加賀は平安時代初期弘仁14年（823年）に成立（江沼、加賀両郡が越前国より分国）しました。この成立順をみても能登の方が加賀より重要視されていたことが分かります。

能登の名はアイヌ語で「ノット」、これは突き出たところの意味とか。類似の地名には、能登川（のとがわ、滋賀県）能取（のとろ、北海道）等々があります。一方、加賀の名は「赫（かがる）」、これは鏡を作る人達が多数いるの意。「カガ」、これは山を背に海に向かって広がった土地の意。また、古語で「カガ」はヘビの意、あるいは大蛇、つまり「カガチ」等々から来たものと思われます。

出雲地方に加賀の潜戸（くけど）という海蝕洞があり出雲風土記にも載っています。出雲地方からの影響もあるかも知れません。

> 日本霊異記（弘仁年間成立の仏教説話集）には越前国加賀郡畝田の村云々の記述がある（現在金沢市畝田町）。
>
> 今昔物語（1120～1140年頃成立の説話集）になると加賀の国、能登の国と区別されて記述されている。

●加賀の名の起源についての民間伝承

「第12代景行（けいこう）天皇の皇子日本武尊（やまとたけるのみこと　倭建命）が東夷（とうい　東の国の大和に従わない人々）を征服したとき、当地方の人々が軍勢に加わったため目的を達することができた。加わったことを賀した（祝った）ので加賀と呼ばれるようになった。三重県で没した日本武尊は白鳥に変身し飛び去った。津幡町加賀爪の村社は白鳥神社（祭神　日本武尊）で加賀爪地内に軍加町（こんかまち）と呼ばれる地

区があり、第14代仲哀天皇（ちゅうあいてんのう　日本武尊の子）の時代当地方より白鳥を獲らえ献上した記録がある」

これは伝承として千数百年続いていますが、日本武尊が実在したとしても当時漢字というものが使われていたかどうか疑問ですが、伝承としては面白いと思います。光仁14年（823年）加賀郡の南半分が石川郡、江沼郡の北半分が能美郡に制定されました。加賀という名は本来、河北地方のことを指すわけです。ちなみに河北の河は浅野川を指します。

●道一族の謎

「道君（道公　みちのきみ）という一族がいた。北加賀の豪族で第29代欽明天皇の頃、高句麗（こうくり　現在の北朝鮮近辺の国）の使者が越の国に漂着したとき天皇と偽って貢物を奪った。668年道君伊羅都売（いらつめ）が第38代天智天皇の采女（うねめ　女官のこと）となり皇子を生んだ。天平宝宇５年（761年）加賀郡の少領（郡司の次官）道公勝石が私稲を農民に貸しつけ法外の利息をとって処罰を受けた」等々が記されています。しかし、これらの記録のあと道一族は史上名を再び現すことはありません。彼らの住居は加賀のどこにあったのでしょうか？

●末松の廃寺

昭和36年野々市町末松の廃寺そばの水路で全国11番目の和同開珎銀銭が発見されました。この末松廃寺の金堂跡も塔跡も法隆寺のそれらより大規模であり、聖徳太子が国家の威信を賭して建立したものより大きな建造物が石川平野の中原に威客を誇っていたとは想像すると愉快ですが、一体誰が建てたのか？道一族ととの関係は？一切記録は見つかっていません。

●大陸との交流

渤海（ぼっかい　満州東部にあった国）の使者10数回、高句麗の使者４回、越の国、能登、珠洲郡越前国加賀郡への到着、漂流の記録があります。又、大陸地方で数々の争乱があり政争を逃れる為種々の技術を持った渡来人が漂着、定住したことも考えられます。あの広い日本海を強度の無い船、幼稚な航海技術で渡れたのかと考えますが、明治38年（1905年）日本海海戦で戦死したロシアの水兵の遺体が、対馬沖からわずか三日後に珠洲郡内浦町松波に漂着しています。海が平穏であったら海流に乗ればそれほど困難なことでも無かったのではと思われます。それを象徴するような伝承を紹介します。

門前町剣地（つるぎぢ）に鍛冶屋の夫婦がいました。年頃の美人の一人娘によい婿をと思い、「一晩に刀を10本（100本だったかも知れません）作った者に娘を差し上げる」と告げると、近郊の腕自慢の若者達が挑戦するが誰一人として成功しません。ある夕方一人の見知らぬ若者が訪ねてきて、「私が挑戦するが成功した暁には必ず娘さんを下さい。ただし私が仕事をしている間絶対に作業場をのぞかないで下さるように」と言い仕事場に入りました。夫婦が約束して、仕事場を離れ様子をうかがっているとものすごいスピードの槌音と完成する前に熱した刀身を水に入れて焼き入れするジューという音が聞こえます。焼き入れの音が９本目（99本目？）になった時にはまだ夜明けに間がある。夫婦はこの見知らぬ若者に娘をやることが心配になり約束を破り仕事場をのぞくと、そこでは真っ赤な顔の鬼が一人で口から炎を吹き出し刀を鍛えていました。彼等はこんな妖怪に大事な娘を渡すわけには行かないと考え、ニワトリの鳴き声をあげました。鬼は、「あと１本で約束の10本が完成するのに夜が明けてしまった。残念！」といってそれまで完成した刀を海に突き刺して去って行きました。いまでも剣地の海岸には10mほどの尖塔状の岩が剣のように数本立っています。それが剣地の地名の由来です。

これはすぐれた製鉄鍛鉄技術を持った渡来人と当地方住民との接触を表している民話です。

（次号へつづく）

註：狼煙－野狼屎とも書く。火の中へ乾燥した狼の屎（くそ）をくべると煙が激しく　出る・珠洲市禄剛岬の集落名

（みやもとまさはる：宮本建設社長・河北潟湖沼研究所歴史委員会委員長）

河北潟湖沼研究所からのお知らせ

●河北潟写真コンクール

水が汚れ、干拓地は荒れている。そんなイメージがある河北潟。でもそんな河北潟にも良いところはいっぱいあるはず。レンズを通して、ふるさと河北潟を見直してみませんか。

カメラを持って河北潟に出かけましょう。そして、あなたが撮ったとっておきの河北潟の写真を応募して下さい。みんなで河北潟の絵はがきを作りましょう。

募集要項

趣　　旨：河北潟を愛する市民の力で河北潟の絵はがき集を作り、その絵はがきを多くの人に送ることによって河北潟のことをもっと知ってもらうことを目的とします。そのために図柄となる河北潟に関する写真を広く一般市民に募集します。

応募規定：応募できるのは河北潟に興味ある全ての方で、応募者の資格は問いません。写真は画質が明瞭であれば、機種、フィルム等規定はありませんが、カラーリバーサルフィルムをプリントしたものを推奨します。

展示用に適当な大きさ（できるだけ６切り以上）に引き延ばした写真を応募して下さい。作品は一枚だけでも組写真でもかまいません。応募された作品は原則としてお返ししません（詳しくはご相談下さい）。

審　　査：応募いただいた作品は８月にコンテスト会場で全て展示させていただきます。展示に特別の配慮を必要とされる方は各自に展示をおまかせしますので、応募の際お知らせ下さい。また、会場にて入場者による投票を実施し、すぐれた作品を選びます。入選者は表彰し、作品は絵はがきの図柄として使わせていただきます。この際、ネガのご提供をお願いします。また版権は河北潟湖沼研究所へ帰属するもとします。入賞者には完成した絵はがき集を10セット分とその他の副賞を差し上げます。

展示会場：内灘町文化会館（予定）

展示期間：８月中

応募締切：1996年７月31日

応 募 先：河北潟湖沼研究所
〒920-02　河北郡内灘町大清台３０２
TEL/FAX　0762-86-0433

●第５回自然保護学校開催要項

「環境と女性」

講師：大舘小夜子　河北潟湖沼研究所代表他

日時：９月30日　午後2:00から

会場：金沢女性センター

●第６回自然保護学校開催要項

「世界湖沼会議からの報告と今後の水質浄化」

講師：沢野伸浩　星稜女子短期大学講師

日時：11月12日　午前9:00から

会場：金沢女性センター

編集後記

河北潟研究所通信の第１号から大幅に遅れて第２号をやっと発行することができました。今回は当研究所の歴史委員会の宮本眞晴氏から河北潟地方の歴史について原稿を戴きました。これは7/29に行われた河北潟自然保護学校での講義原稿に加筆戴いたもので、２回に分けて掲載する予定です。今号では河北潟地方に伝わる伝承について掲載しましたが、次号では河北潟周辺の神社についての話題を掲載します。今回は、「河北潟共和国」などの大きなイベントが続き、事務局が仕事に追われていました。湖沼研究所もいよいよ人手不足となってきました。当通信の編集を手伝っていただける方を募集しています。興味のある方はどうぞ研究所までご一報下さい（Ｔ）。

河北潟湖沼研究所通信　　VOL. 1 NO. 2
1995年８月15日発行

発行所　河北潟湖沼研究所
920-02石川県河北郡内灘町字大清台302
TEL/FAX　0762-86-0433